

コラム

先人の『教訓』に想う

戦略研究ユニット 国際情勢分析第1グループ  
主任研究員 深澤 一能

私事であるが、最近、息子が補助輪なしで自転車に乗れるようになった。とはいえ、まだまだ公道で待ち受けるさまざまな危険を的確に予測して運転できる訳ではないため、町中では横に付いて、ブレーキ等の指示を出す必要がある状態ではあるが。この夏には、田舎の自転車道であれば、並んで一緒にサイクリングすることもできそうで、楽しみである。

自転車といえば、十数年前に初任地である岩手県でマウンテンバイクに乗り始めた。マウンテンバイクは言うまでもなく山の中で楽しむものであるが、筆者のベストトレイルは三陸の港町、宮古市にある。中心街から車を走らせること約1時間（約30km）、重茂半島の姉吉地区にあるキャンプ場を起点とし、本州最東端の灯台がある「鮎（トド）ヶ崎」までの遊歩道。片道4km程度と短いながら、程よいアップダウンが続く先に、急に視界が開け、太平洋の大海原が広がる断崖に抜ける、風光明媚なトレイルである<sup>1</sup>。

転勤してから訪れる機会がないまま時が経ってしまったが、東日本大震災の影響が気になり調べてみた。大地震で沿岸部が津波に飲み込まれた宮古市にあって、姉吉地区では十数世帯の集落の全ての家屋が被害を免れたそうである。守ったのは、先人が石碑に刻んだ『教訓』であった。地区は明治三陸地震（1896年）、昭和三陸地震（1933年）と過去2度の大津波で、生存者がそれぞれ2人と4人という壊滅的な被害を受けた。そして、昭和三陸地震の直後、「高き住居は児孫の和楽 想へ惨禍の大津浪 此処より下に家を建てるな」と刻まれた石碑が建てられた。東日本大震災の際、東京海洋大の現地調査によると、姉吉地区では津波の遡上高が観測史上最大規模の38.9mに達した。しかし、押し寄せた津波は石碑の手前で止まり、石碑より高い場所で暮らすようになった集落は無傷だったという<sup>2</sup>。

間もなく、原子力規制委員会が決定した新規制基準が施行され、電力各社から原子力発電所の適合審査申請がなされるが、政府は成長戦略の推進に向け、再稼働に積極姿勢を示している。一方で、政府は原子力発電所輸出に向けたトップセールスを展開しており、5月にUAEやトルコと原子力協定に署名したほか、インドとも協定交渉の再開で合意。6月にはポーランドなど東欧4カ国首脳と協力推進を確認するなど、国内外で原子力をめぐる動きが活発化してきた。

我が国の経済産業活動を維持・向上するためには、既存の原子力発電所について、福島

<sup>1</sup> 自転車走行禁止の注意書きはなかったと記憶している。万が一、走行禁止であったならばここでお詫びしたい。

<sup>2</sup> 2011/04/18「47NEWS」

第一原子力発電所の事故の『教訓』を反映した安全対策を徹底し、国民の理解を得た上で、の有効活用が現実的であると考えらるべきであろう。また今後、中国やインドをはじめとする原子力新規導入国において、大規模な建設計画が進む現状を鑑みると、我が国の技術力を活かして世界の安全な原子力開発に貢献していくことも重要である。

上記をめぐっては、当然、慎重論も多い中ではあるが、東日本大震災の『教訓』を風化させることのないよう、国内外問わず共有し、原子力利用の安全向上への取り組みを継続していくことが望まれる。

お問い合わせ：[report@tky.iej.or.jp](mailto:report@tky.iej.or.jp)